

10 語りからみた戦前の信州の里山の暮らし

浦山佳恵*・富樫 均**・畑中健一郎*

今日の里山問題をとらえ、身近な自然の利用と環境保全を考える基本的な情報を得るため、語りを手がかりに戦前の信州の里山の暮らしや子どもの目からみた里山の様子を記録した。その結果、当時は稲作・養蚕・馬を中心に複数の生業が営まれていたが特に養蚕は重要な現金収入源になっており人の暮らしに大きな影響を与えていたこと、開田村などでは馬産が主な生業の一つで馬とのかかわりが特に深かったこと、食事は身近に存在する食材を最大限に活用し質素ではあるが各地域で特徴のあるものになっていたこと、子どもたちは家の仕事をよく手伝い、その合間に身近な場所や材料で工夫して遊んでいたこと、などを知ることができた。また、そうした記録からは①川や田んぼには現在に比べはるかにたくさんの生き物が息していた、②シカ、イノシシ、クマ、サルなどの大型野生動物がほとんどみられなかった、③里山の多くが、子ども同士が行って遊べるような開けた空間であった、④草原空間が現在よりもはるかに多く存在した、というかつての里山の様子が浮かび上がった。これらは、身近な自然をせいっぱい活用しながら、つつましくも懸命に暮らしていた昭和初期の当時、まわりにどのような里山が展開していたのかということ、生活の視点から垣間見せてくれる記録といえる。

キーワード：里山、語り、生業、食べ物、子どもの暮らし、昭和初期、信州

1. はじめに

高度経済成長期以降、里山の暮らしと自然環境は大きく変化した。そのため、高度経済成長期以前の里山の暮らしを知ることは、今日の里山が抱える問題をとらえ、身近な自然の利用と環境保全を考えるうえで、もっとも基本的な情報となると考えられる。過去の暮らしに関する情報は、文献や統計資料などから得ることもできる。しかし、生活者の体験として残る記憶は、より具体的であり、生活実感に即した情報として貴重なものといえる。そこで本研究では、語りを手がかりに戦前の信州の里山の暮らしや子どもの目からみた里山の様子を記録した。

2. 調査方法

調査地域を図1と表1に示す。16の調査地域は、なるべく自然環境と社会環境が異なり、長野県全域に均等に分布するよう配慮し選定した。調査は、複数の話者による座談会形式をとり、子どもの頃の暮らしの体験を自由な雰囲気の中で語りあっていただくようにした。各調査地域の範囲は1集落から1村まで様々であった。話者は1地域につき4～8名で、調査時の年齢は64～92歳であった(表2)。主な調査項

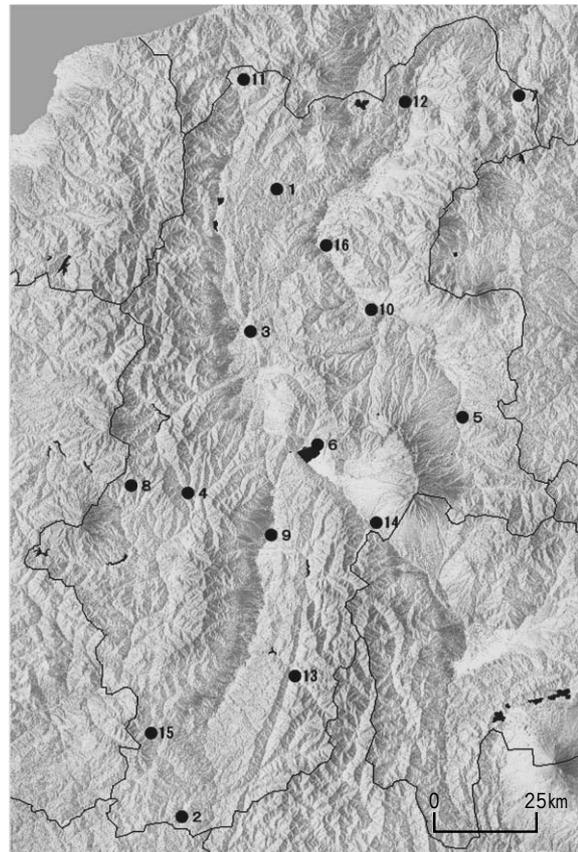


図1 調査地域

* 長野県環境保全研究所 循環社会チーム 〒381-0075 長野市北郷2054-120
** 長野県環境保全研究所 自然環境チーム 〒381-0075 長野市北郷2054-120

表1 調査地域の概況

調査地No	地域区分	市町村名	地区名	標高 (m)	地形要素	地域のシンボリック景観
1	北信	中条村	御山里伊折	800	山地上部小起伏面	虫倉山
2	南信	天龍村	向方	750	山腹小起伏面	早木戸川(天竜川支流)
3	中信	豊科町	細萱殿村	535	内陸盆地の扇状地扇端部～低地	安曇野・犀川・飛騨山地
4	中信	木祖村	小木曾	1,050	山間地の小段丘面	中山道藪原宿
5	東信	八千穂村	穂積穴原	880	火山麓扇状地末端(千曲川右岸)	千曲川・八ヶ岳
6	南信	下諏訪町	富部	770	内陸盆地(湖岸)	諏訪湖
7	北信	栄村	小赤沢	780	山間地の小段丘面	秋山郷・苗場山
8	中信	開田村	西野	1,200	山間地の段丘化した扇状地	御岳・開田高原
9	南信	南箕輪村	田畑	670	段丘化した扇状地扇端部(天竜川左岸)	天竜川・木曾山地
10	東信	上田市	上本郷	480	山間地の扇状地扇中央部	塩田平・別所温泉
11	中信	小谷村	大綱	390	山間地	姫川・雨飾山・大綱峠
12	北信	豊田村	美沢	560	山間地	斑尾山
13	南信	大鹿村		700	山間地	中央構造線・赤石山地
14	南信	富士見町	乙事	1,030	火山麓扇状地	八ヶ岳
15	南信	清内路村		800	山間地	黒川(阿知川支流)
16	北信	千曲市	更級	430	山間地の扇状地扇中央部(千曲川左岸)	千曲川・冠着山

調査地Noは図1に対応。

表2 話者

調査地No	調査地域	調査年月	話者
1	中条村御山里伊折	2002年9月	男(83), 女(79), 女(78), 女(78), 男(78), 男(73), 男(65)
2	天龍村向方	2003年1月	男(79), 男(78), 男(73), 男(71), 男(70)
3	豊科町細萱殿村	2003年3月	男(83), 男(80), 女(78), 男(73), 男(71), 女(70)
4	木祖村小木曾	2003年4月	男(87), 女(83), 男(80), 女(79), 女(70)
5	八千穂村穂積穴原	2003年6月	女(92), 女(89), 女(79), 女(79), 女(78), 男(75)
6	下諏訪町富部	2003年8月	女(88), 男(82), 女(79), 男(77), 男(75), 男(75), 男(71), 男(70)
7	栄村小赤沢	2003年9月	男(78), 男(75), 男(73), 女(73), 女(66), 男(64)
8	開田村西野	2003年11月	男(82), 男(76), 男(75), 女(74), 男(74), 女(73), 男(71)
9	南箕輪村田畑	2004年1月	男(79), 男(78), 男(75), 女(75), 女(64), 女(64)
10	上田市上本郷	2004年3月	女(82), 男(78), 男(78), 女(78)
11	小谷村大綱	2004年5月	男(90), 女(82), 男(78), 女(77), 男(74), 女(72)
12	豊田村美沢	2004年7月	女(82), 女(81), 男(81), 男(79)
13	大鹿村	2004年9月	女(81), 女(79), 女(76), 男(76), 男(73), 男(64)
14	富士見町乙事	2004年10月	女(92), 女(85), 女(84), 男(83), 男(72), 男(76)
15	清内路村	2004年12月	男(79), 男(78), 女(77), 女(75), 男(74), 男(72), 女(71)
16	千曲市更級	2005年2月	男(87), 男(82), 男(78), 男(77), 女(77), 女(73)

調査地Noは図1に対応。()は調査時の年齢。

目は、①子どもの仕事、②遊び、③年中行事、④食べ物、⑤生業で、調査時間は2時間とした。調査期間は2003年9月～2005年3月である。

聞き取り調査は、録音シテープ起こしをして調査地域ごとに小冊子として取りまとめた。ここでは、その16地域の調査記録をもとに、あらためて「生業」「食べ物」「子どもの遊びや楽しみ」「年中行事」「人と人、人と牛馬とのかかわり」「子どもの居場所と遊びの場」に分けてかつての戦前の信州の里山

の暮らしについて整理した。

3. 聞き取り調査の結果

3.1 生業

里山を対象に調査していることもあり、全16地域とも生業は農林業が中心となっていた。とくに稲作と養蚕はすべての地域で営まれており、主食用の米の生産と現金収入のための養蚕という2本柱となっ

ていた。稲作は自給用が中心であるが、中条村や天龍村など平坦地の少ない山間地では、自給するだけの米がとれなかった地域もあり、麦や雑穀も多くの地域で栽培されていた。養蚕については、座敷まで使って寝るところがないくらい蚕を飼っており（千曲市など）、当時は6割が田んぼで4割が桑畑だった（豊科町）というほど養蚕に力を入れていたようである。また、多くの地域で馬を飼育しており、農耕や運搬だけでなく、肥料として田畑に入れる厩肥の生産の役目も馬が担っていた。木祖村や開田村、富士見町では馬産がおもな現金収入源となっていた。下諏訪町では漁業が主たる生業の一つになっていた。

このように、稲作、養蚕、馬を中心に生業が営まれていたが、これらの他にも、麻など商品作物の生産、鶏や山羊など中小家畜の飼育、狩猟、炭焼き、木材の伐り出し、農閑期の出稼ぎ、土木工事への従事など、複数の生業をそれぞれの地域や各戸の事情によって様々に組み合わせて営んでいた。下伊那地方（天龍村、大鹿村、清内路村）の干柿、小谷村での牛の飼育、栄村や木祖村での官有林の仕事、下諏訪町や千曲市の氷切り、栄村や開田村の狩猟など、それぞれの地域ならではの特性もみられたが、当然のことながら山間地では林業関係の仕事に従事する傾向がみられ、また、平坦地と比べ山間地ほどより多くの種類の生業を組み合わせて営んでいる傾向もみられた。

3.2 食べ物

食べ物に関しては、調査したすべての地域で基本的には自給自足であった。食材は田畑で収穫した穀物や野菜を中心に、それに家畜（兎や鶏など）の肉や卵、養殖した田鯉、山菜や小動物などが加わるが、ほとんどが周囲でとれたものであった。普段の食事は、ご飯と味噌汁におかず1品程度の質素なもので、主食であるご飯も白米の場合は少なく、麦や雑穀、野菜などをまぜていた地域が多い。中条村ではご飯にカボチャをまぜて食べたり、夕食にはうどんや蕎麦、おやきなど粉ものを食べていた。小谷村でも焼畑で作った蕎麦や粟などを米の代わりに食べていた。一方、平坦地が多い豊科町や南箕輪村、下諏訪町では、白米をおもに食べており、山間地との違いが表れている。

おかずについては野菜や漬物が中心で、肉や魚などは普段はほとんど食べることがなく、正月や祭りといった特別な日のご馳走であった。正月に兎や鶏

を食べる際にも、骨まで叩いて団子などにして食べたとのことである（下諏訪町、上田市など）。また、鶏の卵は病気の時にしか食べなかったとのことである（富士見町、南箕輪村など）。現在と比べてたんぱく質の摂取量がかなり少ないと思われるが、このたんぱく源を補うものとして昆虫など野生小動物があげられる。ジバチやドジョウ、カジカ、タニシ、ウサギなどは多くの地域で食べられており、カミキリムシの幼虫（中条村など）、サワガニ（千曲市など）、スズメ（豊科町など）などもいくつかの地域で食べられていた。とくに南箕輪村では、ザザムシやコロギ、カエルなども含め、多くの種類の野生小動物が食べられていた。

県内では、現在でも多くの家庭で漬物を漬けているが、当時も漬物をはじめ多くの保存食が作られていた。フキの漬け物（開田村）、ワラビの塩漬け（千曲市）、干しワラビ（中条村など）、干しかぶ（八千穂村）、干し栗（富士見町など）、田鯉の燻製（八千穂村）、干しエビ（上田市）、干した柿の皮（大鹿村など）などがあり、味噌（富士見町など）や醤油（小谷村など）も作られていた。

3.3 子どもの遊びや楽しみ

子どもは家族の労働力の一つで、学校以外の時間は家事や農作業の手伝いをしなければならず、遊べるのは仕事の合間や仕事が終わった後や行事の日などであった。今のようにテレビや既製の遊び道具がなく、農作業の合間に遊ぶことが多かったため、屋外での自然や簡単な道具を用いた遊びが多かった。

川や池や湖での水遊びはすべての地域で行われていた。スキー・ソリ・スケートなどの雪や氷を用いた遊び、竹馬、棒ベース、戦争ごっこ、メンコ、草花の首飾り作り、お手玉、盆花とりなどが多くの地域で行われていた。おかずやおやつの採取を兼ねた遊びも多く、魚とり、サワガニとり、タニシとり、蜂追い、鳥とり、山菜とり、クリ拾い、グミとり、庭や農地周辺に栽培された木の実とりなどが多くの地域で行われ、エビとり（上田市など）、イナゴとり（富士見町など）、ヘビとり（栄村など）、鳥の卵をとる遊び（大鹿村など）もいくつかの地域で行われていた。魚とりの対象となる魚の種類は八千穂村や豊科町、鳥とりの対象となる鳥の種類は豊科町、山菜とりの対象となる山菜の種類は栄村や天龍村でとくに多かった。山仕事が多かった山間地では、ウサギとり（清内路村など）、野生の木の実とり（小

谷村など)、小動物の子を飼育する遊び(開田村など)が行われた。温泉がある地域では、友だちと温泉に行くのが楽しみでもあった(千曲市など)。

遊び道具を作るのも遊びで、戦争ごっこに用いる刀や竹馬などはもちろん、ソリ(天龍村など)、スキー(開田村など)、スケート(中条村など)、魚とり用のヤス(栄村など)・のぞき(清内路村など)・釜(豊科町)、水鉄砲(豊科町)、蜂追いの硝煙(大鹿村)、人形(清内路村など)などを作るのを楽しんだ子どもも多かった。

土手の火入れ(千曲市)、炭焼き(八千穂村)、歌舞伎(大鹿村)、嫁入り(豊田村)、木落とし(下諏訪町)など、大人の真似をして遊ぶこともあった。落とし穴を作る(中条村など)、友だちを川に落とす(八千穂村など)、観光客をだましてドロガイを売る(下諏訪町)、スイカ盗り(大鹿村)、ブドウ盗り(豊科町)、リンゴ盗り(八千穂村など)、カリン盗り(栄村)などのいたづらをしたり、川向こうの村の子どもと川を挟んで石の投げ合い(南箕輪村など)をしたりすることもあった。

3.4 年中行事

すべての地域で複数の年中行事が行われていた。年中行事には、大人中心の行事と子ども中心の行事があった。大人の行事は、お祭り、厄落としが県下で広く行われていた。お祭りは重要な行事で、千曲市など小学校が休校になった地域もあった。他にも蚕玉様(富士見町、大鹿村、清内路村)、山祝い(千曲市)、お薬師様(豊科町)、八十八夜(開田村)、観音様(清内路村)、お鍛様(天龍村)など様々な行事があった。子どもの行事としては、どんど焼きが県下で広く行われていた。どんど焼きは、子どもたちだけで運営した地域が多かったようである。その他にも、鳥追い(中条村、八千穂村など)、ヤシヨウマ(中条村、豊田村)、道祖神(豊田村、上田市など)、天神様(富士見町、南箕輪村など)、十三夜や十五夜(富士見町、大鹿村)、十日夜(八千穂村)、神風講(木祖村)、紙吊し(開田村)などの行事があった。

行事の日程を生業との関係で設定することもあり、清内路村では出作り前の1週間に節句や春祭りなど行事を集中させ、富士見町では養蚕が終わった頃蚕玉様の日を決めていた。

3.5 人と人、人と牛馬とのかかわり

子どもは仕事を通して家族とよくかかわっていた。広く行われた仕事としては、子守り、家の掃除、風呂焚き、風呂の水汲み、夕飯の準備、桑摘みや桑畑の草とりなど養蚕の手伝い、代掻きの手伝い、田植え、収穫物の運搬、焚き物とり、ウサギの餌とり、藁仕事などがあった。遊びより仕事が重視されたようで、大人の昼寝中に水浴びをしたり(南箕輪村、大鹿村)、女の子は他の仕事から子守りの仕事に変わってもらい子守りをしながら男の子のスキーを見たりした(小谷村)。

子どもが遊ぶときには、近所の幅広い年齢層と一緒に遊ぶことが多く、上級生は下級生の世話をし、下級生は上級生によく従った。とくに水遊びは大勢で遊んだようで、上級生は下級生が流されないように川に入らずロープを張って見ていたり(栄村)、下級生が上級生に指示されて川を堰き止める藁を運んだり(大鹿村)することもあった。子守りをする子どもが寄り合い、みんなで小さい子どもをみながら遊ぶこともあった(大鹿村、清内路村など)。

子どもの行事でも上級生と下級生はよく協力した。お松様に使う松を上級生と下級生が分担して引き出したり(小谷村)、道祖神のとき上級生がトウリヨウになり下級生を使って小屋を作り、お賽銭を下級生に分配したりした(上田市)。

行事をとおして子どもが地域の大人とかわることも多かった。厄払いの投げられたお金などを拾うのは子どもの役割で、紙吊し(開田村)や鳥追い(栄村)は子どもが近所の家をまわる行事で、夜遊び(上田市、南箕輪村)、神風講(木祖村)、道祖神(上田市)、天神様(八千穂村・富士見町)のときには近所の家で子どもがおやつやご馳走を食べた。

地域の大人に怒られることも多く、子どもは作物を盗るなどのいたづらをしたり、遊びが高じてソリをするのに道を凍らせたり(天龍村など)、水遊びの時に水田で体を温めたり(中条村)することもあり、そのたびに怒られたことは印象深い思い出として語られた。

子どもが牛馬とかわることも多かった。馬に乗って刈敷刈りに行ったり(八千穂村、開田村)、代掻き時に牛馬の鼻どりをしたり(千曲市、小谷村)、馬が引く田車に乗ったり(南箕輪村)した。とくに代掻きの際には、牛馬はなかなか思うように動いてくれず苦労したようである。馬産地の開田村では、子どもと馬はお互いを知っており、放牧した馬を夕

方子どもが呼ぶと馬は顔を向けて帰ってきたという。

子どもだけでなく、地域の大人同士も様々な場面で互いに助け合っていた。多くの地域でもらい風呂が行われており、干柿の生産をした南信では夜に隣近所が寄り合って柿の皮をむいた地域が多かった(天龍村、大鹿村、清内路村)。隣近所が共同で味噌玉作ることもあった(木祖村、富士見町、清内路村)。これらの機会には、お茶を飲んで世間話をする事が多く、面白い話が始めると誰も風呂に入ろうとしなかった(大鹿村)といわれるほど人々の楽しみにもなっていた。

3.6 子どもの居場所と遊びの場

戦前の子どもたちは、日中のほとんどを戸外で過ごしていた。行動範囲としては、最大でも居住する集落の中心からほぼ半径1km以内であり、ほぼ目の届く狭い範囲に限られていた。数キロ程度のやや遠出をするのは、薪とりや草刈りなどの限られた目的のときであった。行動範囲が狭い理由として、学校に行く前も学校から帰ってきてからも、まず手伝いが優先で、遊べるのは手伝いの合間か通学の途中くらいに限られていたという事情があるものと思われる。しかも移動手段は徒歩しかなかった。ただし、数キロも離れたところで季節的に「出作り」が行われていた地域(清内路村)や小学校高等科の学校まで片道10kmも歩いて通ったという地域(小谷村)など、特別な事情で行動範囲がやや広いケースもある。また、地域によっては農休み時などに温泉に出かける(下諏訪町、上田市、千曲市)ということもあった。

多地域に共通していた遊びの場は、「山」、「田」、「畑」、「川」、「池」、「道路」、「お宮やお堂の庭」、「近所の軒下」、そして「学校」であった。このうち、「川」や「ため池」はとくに夏の遊びの主要な場になっていて、泳いだり魚をとったりした思い出はほとんどの地域で生き生きと語られた。つぎに「田畑」は手伝いの合間に遊べるもっとも身近な空間であり、ドジョウやサワガニ、ヘビやジバチなどの小動物をとったり、摘み草をしたり、野菜の盗み食いなどのいたづらをしたりした場所であった。冬季に雪が少ない県中南部の地域では、凍った田や池がスケート遊びの場になることも多かった。「山」には草刈りや薪とりのために入ったが、同時にそこはアケビやクリやヤマブドウなどの木の実や山菜がとれる場所でもあった。また集落内の「道路」も意外に身近な遊

びの場であった。当時自動車の通行はめったになく、舗装もされておらず、電線もほとんどなかったので、冬のスキーやソリ遊び、凧揚げや竹馬や棒ベースなどの遊び場としてよく利用されていた。

以上は、今回の聞き取り調査のなかで、概ね共通する子どもの居場所であったが、一方で地域性をよく反映するものもあった。たとえば、「湖」(下諏訪町)や「馬の放牧場」(開田村)、あるいは「お宮の歌舞伎舞台」(大鹿村)などである。

4 おわりに

語りから知ることのできた当時の暮らしは以下のようにまとめられる。

戦前の信州では、養蚕がすべての地域で現金収入源になっており、人々の暮らしに大きな影響を与えていた。また、各地で馬が農耕・運搬・厩肥生産を目的に飼育されており、子どもが馬とともに仕事をする事も多かった。馬の餌をとる採草場が各地にあり、とくに馬産地の開田村や富士見町では馬とのかかわりが深かった。麦や雑穀の生産、麻など商品作物の生産、中小家畜の飼育、狩猟、炭焼き、木材の伐り出し、出稼ぎ、土木工事への従事など、人々は複数の生業をそれぞれの地域や各戸の事情により様々に組み合わせて営んでいた。下諏訪町では漁業が主たる生業の一つになっていた。山間地域ほど、山林に関わる生業が行われる傾向があり、より多くの種類の生業を組み合わせて営んでいる傾向もみられた。

食べ物に関しては、白米や白米に麦や雑穀や野菜を混ぜたもの、あるいはうどんやおやきや蕎麦などの粉ものを中心に、漬物や乾物、さらに川魚やタニシ、ジバチなど昆虫を始めとする野生小動物などを加えた食事が普通であった。基本的には田畑で収穫したものを中心としつつ、野生小動物や多種多様な保存食など、身近に存在する食材を最大限に活用していて、質素ではあるが各地域で特徴のある食事がなされていたようである。

日常的に子どもたちは、田畑の仕事や家の掃除、子守り、ウサギの餌とりなど大人の手伝いをよく行っており、むしろ、学校にいる間以外は、手伝いの合間に、身近な場所や材料で工夫して遊ぶという暮らしであった。

子どもの遊びは、竹馬や棒ベースなどの他、水遊び、スキーやスケートなどの雪や氷を用いた遊び、

グミとりや魚とりや蜂追いなどおやつやおかずの採取を兼ねた遊びなど、まわりの自然や身近にある簡単な物を利用したものが多く、遊び道具を工夫して作るのを楽しみにした子どもも多かった。遊ぶときには、上級生も下級生も一緒に集団で遊ぶことが多く、近所の大人に怒られるようないたづらをすることも多かった。

年中行事も各地で盛んに行われており、そのなかにはどんど焼きなどのように子どもが中心になって行う行事も含まれていた。

以上語られた個々の内容は、ごく限られた狭い生活空間内での個人的記憶の集合である。しかし、地理的に相互に離れ、多様な立地条件下にある県内16地域の語りを整理しまとめてみると、下記のように多くの地域に共通に認められる当時の里山の様子が浮かび上がった。

- ①川や田んぼなどには現在にくらべてはるかにたくさん生き物が生息していた（全地域共通）
- ②その一方集落周辺の里山にはシカ、イノシシ、クマ、サルなどの大型野生動物がほとんど見られなかった（中条村、木祖村、開田村、大鹿村、清内路村）
- ③当時の里山の多くは子ども同士が行って遊べるような開けた空間であった（中条村、木祖村、八千穂村、栄村、開田村）
- ④「干草を刈ってきた帰りに、（干草の）束へ盆花挟んでゆっさ、ゆっさと。（富士見町）」と語られるように、当時の里山には薪や刈敷などをとる雑

木林のほかに、オミナエシやキキョウなどの野草があたりまえに咲く草原空間が現在よりもはるかに多く存在した（中条村、天龍村、木祖村、八千穂村、開田村、富士見町）

これらの特徴は、身近な自然をせいっぱい活用しながら、つましくも懸命に暮らしていた昭和初期の当時、まわりにどのような里山が展開していたのかということ、生活の視点から垣間見せてくれる記録といえる。

謝 辞

調査を行うにあたり、調査対象地域となった市町村役場には会場の手配や調査協力者の紹介などで大変お世話になった。また、中条村の久保田寿一さん、天龍村の村松和市さん、村松英文さん、豊科町の飯沼冬彦さん、木祖村の澤頭修自さん、八千穂村の渡辺一明さん、下諏訪町の金子敬二さん、栄村の山田直広さん、開田村の山下吉右エ門さん、南箕輪村の松澤英太郎さん、上田市の小林善幸さん、八幡たみ子さん、小谷村の戸沢精一さん、豊田村の平山重亀さん、大鹿村の古屋敷彰美さん、富士見町の三井清エ門さん、清内路村の桜井一芳さん、千曲市の塚田哲夫さんには話者への仲介と聞き取り調査の準備、調査への同席、調査後の内容確認などご協力をいただき、ご苦勞をおかけした。そして、話者の95名の皆様には、貴重な体験をととてもわかりやすく教えていただいた。以上の皆様に深く感謝いたします。